

報道関係各位

NHK international, inc.

一般財団法人 NHK インターナショナル

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業
企画展「The quick brown foxp2 jumps over the lazy media.」
(すばしっこい茶色の言語遺伝子はのろまなメディアを飛び越える)
開催のご案内

文化庁が主催、一般財団法人 NHK インターナショナルが企画・運営する「海外メディア芸術祭等参加事業」は、メディアアート、映像、ウェブ、ゲーム、アニメーション、マンガ作品等の優れたメディア芸術作品を紹介するため、海外のフェスティバルや施設において、文化庁メディア芸術祭の受賞作品を中心に展示・上映・プレゼンテーション等を実施しています。

このたび、チリ・サンチアゴで10月9日(金)から10月25日(日)まで開催される「第12回メディアアート・ビエンナーレ」に参加し、企画展「The quick brown foxp2 jumps over the lazy media.」(すばしっこい茶色の言語遺伝子はのろまなメディアを飛び越える)を開催します。

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業 企画展

「The quick brown foxp2 jumps over the lazy media.」

(すばしっこい茶色の言語遺伝子はのろまなメディアを飛び越える)

会期:2015年10月9日(金)～10月25日(日) ※月曜休館 オープニング:10/8(木)19:00—

会場:チリ国立美術館 地下一階 SALA MATTA
(Parque Forestal チリ・サンチアゴ市)

入場料:無料

<http://jmaf-promote.jp/>

主催:文化庁

共催:Chilean Video Corporation

企画ディレクター:久保田 晃弘(アーティスト/多摩美術大学教授)

事業アドバイザー:吉岡 洋(京都大学大学院文学研究科教授/美学・芸術学)

毛利 嘉孝(東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科准教授/社会学)

企画/運営:一般財団法人NHKインターナショナル

本件に関する問い合わせ先

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業事務局(一般財団法人NHKインターナショナル内)

担当:湧井(わくい)・本間(ほんま)・小山(おやま)

E-mail: jmaf-info@nhkint.or.jp TEL: 03-6415-8500 FAX: 03-3770-1829

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業 企画展

「The quick brown foxp2 jumps over the lazy media.」

(すばしっこい茶色の言語遺伝子はのろまなメディアを飛び越える)

チリ国立美術館において開催される「メディアアート・ビエンナーレ」にて文化庁メディア芸術祭企画展「The quick brown foxp2 jumps over the lazy media.」を実施いたします。太平洋を17,000km隔てて向い合う日本とチリは、その地形や多くの火山を有するなど多くの共通点がある一方、文化的な交流や情報はまだ十分とはいえません。今年で第12回を迎える「メディアアート・ビエンナーレ」のテーマである「Speaking in Tongues」を受けて、「Foxp2」という言語遺伝子から言語とメディアの関係をコンセプトに、アーティスト/多摩美術大学教授である久保田晃弘氏選出した作品を紹介します。昨年のブラジルに続き、南米で二度目の開催です。

展覧会コンセプト

企画ディレクター 久保田 晃弘

言語が先か、メディアが先か。言語能力を持たない生物にとって、メディアはメディアとしての意味を持たない。逆に言語能力をもつ生物にとっては、あらゆるものがメディアになり得る。オーディオビジュアル、コード、データ、さまざまな素材や表現の中に言語がある。言語はまず、個人が生み出す実験的な発話からはじまる。聴覚的な発話が社会的に共有されて、分節されることで、視覚的な文字が生まれ、構造的な文法が生成する。そんな生物の知覚に根ざした言語の中には、言語を生み出した身体があり、さらに身体が活動する環境がたたみ込まれている。

新しいメディアの中には新しい言語が潜んでいる。メディアを言語化することで、コミュニケーションが可能になり、同時にその言語(ラング)から、訛り(バロール)としての個性が派生する。この展覧会では、文字、音声や映像のみならず、コードやデータといった新たなメディア＝言語に着目することで、そこから見えてくる訛り＝個人的文法としてのメディア芸術作品を紹介する。

久保田 晃弘/KUBOTA Akihiro

アーティスト/多摩美術大学教授

多摩美術大学情報デザイン学科メディア芸術コース教授。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了/工学博士。1960年生まれ。衛星芸術、バイオアート、デジタル・ファブリケーション、自作楽器によるサウンド・パフォーマンスなど、さまざまな領域を横断・結合するハイブリッドな創作の世界を開拓している。

参加作家

石橋 友也／ISHIBASHI Tomoya

1990年、埼玉県生まれ。生物学をバックグラウンドに持ち、「自然と人間との相互作用とその美学」をテーマとし、表現活動を行う。

五島 一浩／GOSHIMA Kazuhiro

映像作家、イメージフォーラム映像研究所専任講師。デジタルとアナログの境界をテーマに、実写・CGを問わず映像作品を多数制作。近年は独自の手法による立体映像作品を多く制作している。

水江 未来／MIZUE Mirai

1981年生まれ。多摩美術大学大学院グラフィックデザイン学科卒業。「細胞」や「幾何学図形」をモチーフにした抽象アニメーション作品を多数制作し、主に国際映画祭を舞台に活動をしている。

ひらの りょう／HIRANO Ryo

1988年生まれ。多摩美術大学情報デザイン学科卒業。映像作家、漫画家、イラストレーター。FOGHORN所属。

福島 諭

1977年、新潟県生まれ。作曲家、演奏家。情報科学芸術大学院大学(IAMAS)修了。2002年よりコンピュータ処理と演奏者との対話的な関係によって成立する楽曲を発表。

Alex VERHAEST(ベルギー)

1985年、ベルギー生まれ。言語や物語、コミュニケーションの不可能性を強く意識させる作品を制作する。現代のテクノロジーを駆使した、非常に高精度な絵画的映像作品を通じて、絵画と映像を並列的なメディアとして提示し、映像表現の新しいあり方を問う。

Benedikt GROSS & Joey LEE

Benedikt GROSS(ドイツ)領域横断的に、思弁的デザイン、コンピューショナル・デザインを展開し、人と人、データ、環境の関係性に興味を持つ。

Joey LEE(アメリカ)インタラクションデザインや環境学、メディアアートの実践を通して、実験的な試みをする地理学者。

Dmitriy KROTEVICH(ロシア)

ロシア、サンクトペテルブルク出身。コンピュータサイエンスを研究。

Emilio VAVARELLA(イタリア)

1989年、イタリア生まれ。ニューヨークを拠点とするマルチメディアアーティスト。

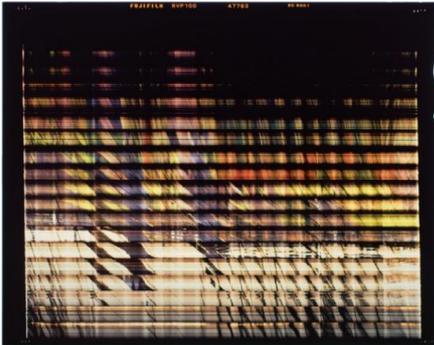
Ruben PATER(オランダ)

修士課程をSandberg Institute(アムステルダム)で学び、現在は、Design Academy Eindhovenで教鞭をとる。政治的なテーマを扱い、物語性を帯びた視覚的な作品に展開する。

作品展示 3つのテーマで構成

■Audio-Visual

視覚と聴覚が言語をつくりだす、そして言語を表現するための、もっとも基本的な知覚である。文字による詩から具体詩や音響詩が生まれたように、知覚は言語の源であるだけでなく、言語を既存の(共有された)文字や文法から解放する。新しい知覚と新しい言語が表裏一体であるように、新しい言語によってメディアは常に再発見され、そこから新たな訛りが生まれる。



©2014 Kazuhiro GOSHIMA All Rights Reserved.



©Alex Verhaest 2014



『WONDER』©CALF - CaRTe bLaNcHe - Mirai Mizue - 2013



©LEED PUBLISHING CO.,LTD / ryo hirano/FOGHORN

■出展作品

左上: 五島 一浩『これは映画ではないらしい』(2014/メディアインスタレーション/第18回アート部門優秀賞)

右上: Alex VERHAEST『Temps mort / Idle times - dinner scene』

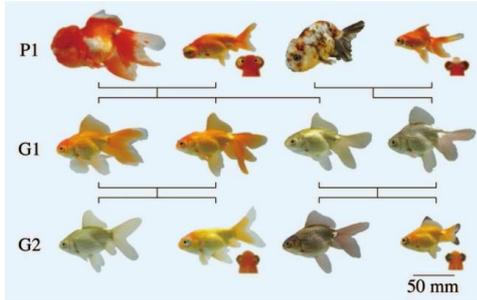
〔2014/インタラクティブ映像インスタレーション/第18回アート部門新人賞〕

左下: 水江 未来 短編アニメーション作品集〔2003-2013/第7、11、13、15、17回アニメーション部門審査委員会推薦作品〕

右下: ひらの りょう『ファンタスティック ワールド』〔2014/オンラインコミック/第18回マンガ部門審査委員会推薦作品〕

■Code

言語を生み出す知覚世界は情報からできている。情報が知覚されることによって、情報は伝達や処理に適するように形式化され、ふたたび情報として解釈できるものに表現される。情報ネットワークの広がりによって、環境としてのビッグデータが顕在化された現在、言語の源としてのデータの素材と形式を批評していく精神がますます必要となってくる。



©Tomoya Ishibashi



©2014 Emilio Vavarella All rights reserved

■出展作品

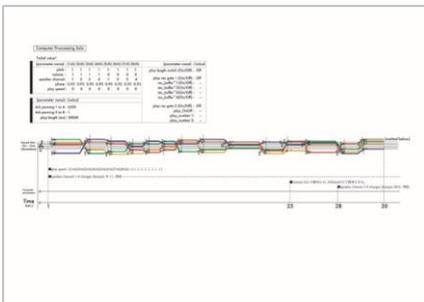
左: 『金魚解放運動』石橋友也〔2014/メディアパフォーマンス、バイオアート/第18回アート部門審査委員会推薦作品〕

右: 『THE CAPTCHA PROJECT』Emilio VAVARELLA

〔2014/グラフィックアート、インスタレーション/第18回アート部門審査委員会推薦作品〕

■Data

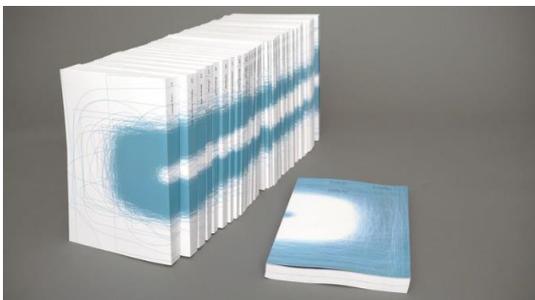
言語を生み出す知覚世界は情報からできている。情報が知覚されることによって、情報は伝達や処理に適するように形式化され、ふたたび情報として解釈できるものに表現される。情報ネットワークの広がりによって、環境としてのビッグデータが顕在化された現在、言語の源としてのデータの素材と形式を批評していく精神がますます必要となってくる。



©2014 FUKUSHIMA Satoshi All Rights Reserved.



©Ruben Pater



©Benedikt GROSS & Joey LEE



©Dmitriy KROTEVICH

■出展作品

左上: 『《patrinia yellow》for Clarinet and Computer』福島 諭〔2014/メディアパフォーマンス/第18回アート部門優秀賞〕

右上: 『Drone Survival Guide』Ruben PATER〔2014/グラフィックアート、ウェブ/第18回アート部門優秀賞〕

左下: 『The Big Atlas of LA Pools』Benedikt GROSS & Joey LEE〔2013/データアート/第17回アート部門優秀賞〕

右下: 『PixelDrifter - the pixel-sorting app』Dmitriy KROTEVICH

〔2014/アプリケーション/第18回エンターテインメント部門審査委員会推薦作品〕

関連プログラム

■ ALMA 研究所レジデンス制作 『ARTSAT: Search for Extra-Terrestrial Poetics』

本企画展の企画ディレクターである久保田晃弘氏が2010年より率いる「ARTSAT: 衛星芸術プロジェクト」は、地球を周回する「宇宙と地上を結ぶメディア」としての衛星を使って、さまざまな芸術作品の制作を展開していくプロジェクトです。今回、日米欧が共同で運用する超最高性能電波望遠鏡（アルマ望遠鏡）を有する国立天文台チリ観測所にて、久保田氏自身がレジデンス制作を行います。今回のアルマレジデンスにおいては、アルマ電波望遠鏡を宇宙からのデータを捕獲するメディアと捉え、アルマで受信された生のデータに触れる（知覚する）ことで、その中に潜む言語を探索、コード化し、そこから新たな詩学を発見すること＝地球外詩学探査（SETP: Search for Extra-Terrestrial Poetics）を試みます。参考:アルマ望遠鏡ウェブサイト(<http://alma.mtk.nao.ac.jp/j/>)

関連イベント

■アーティストトーク

出演:五島 一浩、石橋 友也、Alex VERHAEST オンラインモデレーター:久保田 晃弘

日時:10月9日(金) 16:30- 会場:Salón Blanco, MNBA

3人の出典作家が自作のコンセプトや素材、技法について語ります。ディスカッションを通じて、日本のメディアアート、日本のバイオアートの特徴を浮き彫りにし、さらにグローバルな視点からの位置付けをはかります。

■ワークショップ「Creative Coding for beginners」

講師:田所 淳

日時:10月9日(金)11:00- 会場:Salón Blanco, MNBA

対象:15歳以上 定員:15名 ※参加される方はノートパソコンを持参

オープンなプログラミング言語 Processing を用いた、クリエイティブな表現のハンズオンワークショップを行います。色や形をコードという言葉で表すことで、一体何が可能になり、何が不可能になるのでしょうか？ 言語と表現を結びつけることを体験することで、メディアアートの未来を望みます。

■デモンストレーション「映像とフレーム」

作家:五島 一浩

日時:10月9日(金)、10日(土)、11日(日) 各日 11:00-、12:00- 会場:SALA MATTA, MNBA

フィルムのフレームは、ビデオテープの登場で一旦消滅し、デジタルムービーの登場で再び復活しました。五島による「コマの無い動画カメラ/映写機」システムによって、映像とフレームの円環が閉じ、新たなループが生まれました。果たしてこれから映像はどの方向に向かい得るのか？装置の仕組みを知りながら、未来の映像とそのための知覚について考えてみます。

■プレゼンテーション&上映

プレゼンター:久保田 晃弘(企画ディレクター/第15回-17回エンターテインメント部門審査委員)

日時:10月18日(日)16:00-

会場:Salón Blanco, MNBA

本企画展のディレクター久保田氏によるプレゼンテーション。審査委員の視点からみた文化庁メディア芸術祭の紹介、アルマでのレジデンス制作についての報告も行います。その後、アニメーションの上映を行います。

【上映作品】

水江 未来『Fantastic Cell』『LOST UTOPIA』『METROPOLIS』『MODERN No.2』『WONDER』、
ひらの りょう『ホリディ』、Omodaka『Hietsuki Bushi』、大友 克洋『火要鎮』

関連上映

■文化庁メディア芸術祭 受賞作品上映

会場:Salón Blanco, MNBA

日時:10月20日(火)12:00- 上映プログラム「Beyond the Technology」

10月21日(水)12:00- 上映プログラム「Portrait of Japanese Animation」

10月23日(金)12:00- 上映プログラム「The Q of moving-image」

参考

参加フェスティバル「メディアアート・ビエンナーレ」について

今年で12回目を迎える「メディアアート・ビエンナーレ」(Bienale de Artes Mediales=BAM)は、Franco Chilean Festival of Video Artを前身に1993年にチリの首都サンチアゴで始まりました。科学と技術、社会とアートをキーワードに、その年のテーマが決められ、出展作品がキュレーションされます。第12回のテーマは「SPEAKING IN TONGUES」。20世紀に解明されたFOXP2遺伝子は、あらゆる言語は数千年の時間軸の中で積み重ねられた経験値の法則から構築され、それらは人類以外のすべての生物に共通していると定義しています。2015年のBAMでは、私たちの現代技術は未来の言語生成にどのように影響を与えていくのかを、異なる世代やバックグラウンドを繋ぐ現代の社会のコミュニケーションに焦点を当て開催されます。会場はチリ独立100周年を記念して建立されたチリ国立現代美術館で、作品展示のほかにも、会期中には基調講演やアーティストトーク、映像作品の上映等が連日開催されます。



BAM ウェブサイト <http://www.bienaldeartesmediales.cl/12/>

参考

文化庁メディア芸術祭について

文化庁メディア芸術祭はアート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において優れた作品を顕彰するとともに、受賞作品の鑑賞機会を提供するメディア芸術の総合フェスティバルです。平成9年度(1997年)の開催以来、高い芸術性と創造性をもつ優れたメディア芸術作品を顕彰し、受賞作品の展示・上映や、シンポジウム等の関連イベントを実施する受賞作品展を開催しています。昨年度[第18回]は、世界71の国と地域から3,853点の作品の応募があり、文化庁メディア芸術祭は国際的なフェスティバルへと成長を続けています。また、文化庁では、メディア芸術の創造とその発展を図ることを目的に、文化庁メディア芸術祭の受賞作品を国内外で広く紹介する多彩な事業を実施しています。海外・国内展開や創作活動支援等の関連事業を通じ、次代を見据えたフェスティバルを目指しています。

■文化庁海外メディア芸術祭等参加事業

本事業は、世界各地のメディア芸術関連施設やフェスティバル等にて文化庁メディア芸術祭の受賞作品を中心に上映・展示・講演を行う文化庁メディア芸術祭の関連事業です。



平成26年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品



海外メディア芸術祭等参加事業(Lucca Comics & Games2014)

平成27年度[第19回]文化庁メディア芸術祭

作品募集	2015年7月7日(火)～9月9日(水)
受賞発表	2015年11月下旬
受賞作品展	2016年2月3日(水)～2月14日(日) ※国立新美術館は2月9日(火)休館 会場:国立新美術館(東京・六本木)他
ウェブサイト	http://j-mediaarts.jp
Facebook	http://www.facebook.com/JapanMediaArtsFestival
Twitter	@JMediaArtsFes



NHKインターナショナルは、文化庁が主催する文化庁メディア芸術祭の関連事業である「海外メディア芸術祭等参加事業」の企画運営を受託し、日本のメディア芸術の発展に努めています。